実践報告

短期大学におけるティーム･ティーチング
ある英語教育実践の報告（1）

ジョナサン・ヒギンズ，奥井現理

要旨：本稿は，飯田女子短期大学（長野県飯田市）看護学科２年対象の「英語講読」における教育実践と教育方法を報告するものである．ジョナサン・ヒギンズと奥井現理の両名は，平成29年度前期（4-7月）において，ヒギンズが授業を主導し，奥井が補佐をする形で，ティーム・ティーチング（以下，T.T.）を行った．本科目の目標は，学生の，学問的かつ専門的な英文読解能力を向上させることである．この目標を達成するための方法として採用されたのは，単純な「機械的」読解に習熟させることではなく，発音やイントネーション，コミュニケーション実演の熟達向上に取り組ませることであった．以下，本稿においては，その教授過程および教員のパフォーマンスを詳述するものとする．

Key words： T.T.（Team-Teaching Method），ネイティブ･スピーカー（Native Speaker），医療英語（Medical English），英文読解（English Reading），会話練習（Conversation Practice）．

◆◇

1．はじめに

ジョナサン・ヒギンズは，英国出身のネイティブ・スピーカーである．日本在住歴が22年以上であり，飯田女子短期大学の非常勤講師を1999年より務めている．また，飯田市内にて英語教室を運営しており，かつ，いくつかの会社において英語の契約講師を務めている．奥井現理は，日本人であり，2010年より飯田女子短期大学の准教授である．奥井は家政学科所属で，教育学，英語，ドイツ語，哲学等を担当している．また，いくつかの高等学校において英語を教えた経験をもつ．ヒギンズと奥井の両名は，平成29年度開講に先立って，看護学科２年生を対象とする科目「英語講読」をT.T.体制で指導することにした．

本科目には，二つの主要な目的がある．第一に，看護学科の学生は飯田女子短期大学を卒業する際には中級下レベルの専門的医療英語に関する，実務的な知識をもつことができているようにするということである．第二に，学生は，卒業後に学習を継続したり研究を行ったりすることを選択することもできるよう，専門的な英語レポートや原文を読解することができるようにするということである．

これら二つのニーズを満たすためには，ネイティブ・スピーカーと日本人の英語教師が指導を行うことが適切であるとヒギンズ・奥井の両名は考えた．日本の高校生ならびに大学生は専門英語の学習経験が乏しい．彼らは，高等教育機関に入学する以前に汎用的な英語を六年間学んでおり，英文法，構文，単純な翻訳の知識を一定程度はもっている．その一方で，文内での単語発音に関する知識は乏しく，アクセントやイントネーションに関す

る能力も低いといわざるをえない．それゆえ，ヒギンズ・奥井の両名は，T.T.の指導体制をもって，二言語による理解を促す指導（奥井）と，ネイティブ・スピーカー的会話の教授（ヒギンズ）とを組み合わせること，および，アクセント，イントネーション，非言語的コミュニケーションの説明（ヒギンズ／奥井）を行うこととした．

教室においては，両名は教材として，2人もしくは３人のネイティブ･スピーカーによる会話文を用いた．なんとなれば，日本の高校生は会話文を用いた英語学習に慣れ親しんでおり，かつ，ペアワークもしくは少人数でのグループワークによる会話練習という方法にも慣れているからである．

2．指導体制

T.T.とは，2人以上の教員が協力して授業を行うことである．日本では，高等教育機関におけるこの教育技術にかかる相対的有利性・不利性を研究したものが，多くはみられない（注１）．それゆえ，本報告が，今後の英語教育研究に資するものとなることを願うものである．

日本の公立中学校・高等学校においては，英語教育にT.T.法をもちいる例がよくみられる．日本人の英語教師（JTE）が，授業内でネイティブ・スピーカーの補助教員（ALT）の補佐を受ける，というものである．このシステムは，1987年に開始した，文部科学省（旧文部省を含む）によるJETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）を通して，日本の公教育に定着・機能しているといえよう（注２）．

本実践は，この教育方法を，事実上ひっくり返したものである．すなわち，ネイティブ･スピーカーの教員（ヒギンズ）が授業を主導し，日本人教員（奥井）が，二言語的な補佐を行う，という体制にしたのである．

ネイティブ・スピーカー（ヒギンズ）ではなく日本人教員（奥井）が前年度まで本科目を担当していたときのような，旧来の「英語講読」という科目名が示唆するような学問的な目標は採らないものとした．この指導体制には，特有の，はっきりした利点があるからである．このアプローチは，日本の教育機関において見いだされ確立されてきた方法論に反する側面があるものの（注２），効果的なものであった．

以下に，本実践の概要を記す．

２－１　対象・時期

看護学科２年生（三年制）53名，平成29年度前期（４月から７月）

２－２　テキスト

西原俊明，西原真弓，Assunta Martin：English for Medicine　医療・看護のためのやさしい総合英語，金星堂，東京，2005.

このテキストは，医療系学生，看護学生用に作られており，13章と二つの復習セクションで構成されている．著者の意図は，ここに収められた基礎的な練習問題を通して，学生が実際の医療現場で，患者，同僚，関係者と意思疎通を図ることを学べるということである．なお，本実践においては，通常学習用の全13章が用いられ，復習セクションは用いら

れなかった.

これらの章はすべて，五つのサブ・セクションから構成されている．すなわち，「I Vocabulary Study」,「Ⅱ Listening Activity」,「III Reading Activity」,「Ⅳ Writing Activity」,「Ⅴ For Your Information」の五つである．本実践においては，「I Vocabulary Study」および「Ⅱ Listening Activity」を集中的に用いるものとし，「III Reading Activity」はそれほど用いられなかった．また，「Ⅳ Writing Activity」,「Ⅴ For Your Information」は用いないものとした．なお，第10章にもとづいた会話テスト（ヒギンズ）が授業内で行われ，さらに，2回の授業では用意されたワークシートを用いた復習（奥井）が行われた（２－４参照).

２－３　授業の過程および教育方法

授業は，ヒギンズによる簡単な英語の挨拶で開始された．奥井が学校管理に関する連絡を行うこともあったが，これは学習に直接の関係はない.

毎回の授業進行は以下のとおりである（ローマ数字による番号は，テキストのセクション番号を,(1)～(6)は，授業の進行順序を示すものとする).(1)前回扱った「Ⅰ Vocabulary Study」の振り返り，および「Ⅱ Listening Activity」クラス全体によるスピーキング練習，(2)「Ⅰ Vocabulary Study」，(3)「Ⅱ Listening Activity」,(4)「コミュニケーション活動の練習」，(5)「コミュニケーション活動」,(6)「Ⅲ Reading Activity」.

以下は,(1)～(6)の詳細である．(1)の復習は，学生がヒギンズの主導で前回の重要な単語・語句を振り返るというものである．これは，最初にヒギンズと一緒に読み，次に発音やアクセントをチェックするという形で行われる．続けて，前回の「Ⅱ Listening Activity」の練習を行う．これは，ヒギンズが話者A，学生が話者Bのパートを読みあげ，次にパートを交換することによって復習を行うというものである.

(2)「Ⅰ Vocabulary Study」の学習は次の通りである．すべての章には，それぞれの内容に関連した医療英語の単語・語句のリストが掲載されている．ヒギンズがジェスチャーやロールプレイ（奥井が加わることもある）を行い，学生がそれら単語や語句の意味を推測するのを助ける．明らかに学生が意味を理解しているにもかかわらず，どの単語や語句がそれに該当するのかがわからないときには，奥井が語源を示して学生が正しい意味に到達できるよう導くこともある.

(3)「Ⅱ Listening Activity」の指導過程は，最初に学生がテキスト添付のCDを聴くところから始まる．すべてのリスニング用会話文がテキストに掲載されてはいるのだが，そこには６～８ヶ所の空欄が設けられており，学生は，リスニングを通して，空欄にあてはまる語が何であるかを聴き取ることを課せられている．この際，学生がスペリングに補助を要することもあった．なお，このCDには，二種のスピード（普通のものと遅いもの）による同一会話文の読み上げが収録されており，学生は空欄を埋めながら普通のものを１回，遅いものを２回聴くことができる．その後，ヒギンズが，会話文を，空欄にあてはまる語を補いつつ，はじめに遅く，次に普通のスピードで，それぞれ１回ずつ読み上げる．この際，ヒギンズはたいてい，空欄に当てはまる語や表現を学生に読み上げさせることで，学生の理解度を把握していた．奥井はこのとき，同時に黒板に該当表現の日本語訳を書き上げていた．最後にヒギンズが，黒板上の表現を学生に読み上げさせ，奥井がアクセントやイントネーションのマークを付け加えていた．この際，奥井が，学生が知っていると思われる

英語や日本語の表現に関する知識を活用して，語源の説明を付け加えることもあった．
(4)「コミュニケーション活動の練習」は，次のように行われた．まず，ヒギンズがリスニング用会話文を読み上げ，学生がそれに続けて読むという練習を２回行う．次に，ヒギンズが話者A，学生が話者Bのパートを読み，その後パートを交換して読むという練習を，それぞれ１回ずつ行う．奥井はこの際，学生とともに読み上げることで，正確な速度・リズムを維持させたり，アクセントやイントネーションの補強・強化を図った．
(5)「コミュニケーション活動」においては，学生は「リスニング活動」で用いられた会話文を３回，3人のパートナーとともに練習することになる．なお，学生には，パートナーの名前をローマ字で書き留めるための紙片が配布されており，この紙片は，3回の授業で用いることができるようにデザインされている．ヒギンズと奥井が，「教室内を自由に歩き回り，3人の新しい友達を見つけなさい」「１回練習を終えるたびに，パートナーのサインをもらいなさい」と指示を与えて，この活動は始められる．学生たちは２年生であるから，互いのことをよく知っており，この活動においては，内気で相手に声をかけられないという困難は，ほぼ起こらなかった．なお，この活動後には，奥井が各々の紙片を毎回回収していた．

授業内でのすべての指導は，ヒギンズがまず英語で行うという形で進められたが，学生たちの多くがそれを理解できず混乱が生じていると教員が感じたときには，奥井が日本語訳を提供することにしていた．ときには，奥井が板書を行うにあたって，何らかの語や表現に関する説明を要することがあり，その際には奥井がヒギンズに英語で説明を求めた．奥井とヒギンズは，授業内ではすべて英語でコミュニケーションをとっていたのである．このことは，学生の学習を補強する役割を果たした．また，奥井が日本語で，短い指導を行ったりヒントを提供したりすることもあったが，これは学生の読解上障害となるものを除去するために行われていたのである．なお，ヒギンズは中級下レベルの日本語を解し，話すことができる．また，医療に関する英語表現や日本語表現に明るい．さらに，日本人学生が理解しやすいアクセントや話し方を心得ており，複雑な熟語や婉曲表現を用いることも極力避けるようにしている．
(6)「Ⅲ Reading Activity」の活動は，当初は英文読解に特化した練習として計画され，奥井が指導を主導することになっていた．しかし，時間の制約により，この活動はほとんど行われず，ヒギンズと奥井による短いコミュニケーションゲームをもってこれに替えていた．なお，このゲームにおいては，日本語訳は適宜与えられていた．このゲームは，ジェスチャーゲームや単語推測ゲームといったものである．ゲームの１回目はヒギンズが模範を示し，2回目以降は学生主導で行うという形が多かったが，その際にもヒギンズが，主導している学生に手がかりを与えるという形で，しばしば補助を行っていた．こうしたゲームは学生にとても人気があり，クラス全体の授業参加をうながすことになった．

２－４　評価，授業の改良，評定

ヒギンズと奥井は，毎週，授業の前日に，授業準備のためのミーティングを行っていた．そこでは，学生にとって理解が難しいと考えられる単語や語句を指摘し，ジェスチュアやロールプレイによって意味の説明を補助する方法を話し合っていた．そして，会話文を通読し，とりわけその会話文が時代遅れであったり日本における使用が不適切であったりする場合（たとえば，ヤード・ポンド法など）に，ヒギンズが代替となる表現を提案してい

た．また，前回の授業について，教授を改良できる点や，学生の授業内でのよりよい学習をうながすことのできる点を指摘し，話し合っていた．こうした指導の自己評価は功を奏した．たとえば，(5)「コミュニケーション活動」において，ヒギンズと奥井が学生に混じりパートナーと会話練習を行いサインを行うというアプローチの採用に踏み切ったことが挙げられる．これは全体のパフォーマンス向上をうながし，かつ，学生が毎週同じパートナーと練習するのを防ぐこともできる．なお，ヒギンズは50点満点の評定を担当しているが，そのうちこの活動は毎回の「サイン用紙（上述の「紙片」）」にもとづき，20点満点で評定された．

また，ヒギンズは，授業内での会話パフォーマンス評定のために，テキストの第10章を選んだ．学生はペアを組み，第10章の会話文を用いて，教室の前部を（会話文の舞台である）診察室にみたててロールプレイを行った．なお，このロールプレイは30点満点で評定された．この評定は，会話文の記憶，適切な発音，アクセントおよびイントネーション，非言語的コミュニケーション，全体の印象といった観点で行われた．

奥井は，飯田女子短期大学の試験期間内に行われるペーパーテストを作成した．このペーパーテストは50点満点で評定される．このテストのために，テストを模して作成された自習用ワークシートが配布されるとともに，2回の自習時間（教員は質問や相談を受け付けるために待機している）が設けられた（２－２参照）．

3．会話練習を通した英文読解能力の訓練

テキスト『English for Medicine　医療・看護のためのやさしい総合英語』には，すべての章に，リスニングのための会話文と，読解のためのエッセイが収録されている．過去，本科目の指導を担当した奥井は，このエッセイに重点をおいて指導を行っており，試験も当然に，このエッセイ読解にもとづくものであった．しかし，ヒギンズと奥井は，今年度よりこの重点を会話文に置くこととしたのである．ヒギンズと奥井の両名は，この会話文を読解練習のよい教材であると考えた．この会話文には，看護師向けの会話においてヒントとなるものだけでなく，医療英語の単語や表現が豊富に含まれているからである．たとえば，有名な病気，病状，症状，治療法，医療器具等々の名称といったものである．対象となる学習者にとって，この中級下レベルのこうした会話文は，いかにも適切であった．そこで用いられている文法や構文は，日本人の大学生がよく知っているものである．そのため，ヒギンズと奥井は，医療用語や，医師／看護師／患者の会話によく織り込まれる（感嘆詞などの）発声といったものに重点を置くことができた．また，背景となるものをそれほど多く説明しなくても，2年生の看護学生たちは，前年度に学んだものを活かしつつ，会話の文脈や意味を理解することができていた．それゆえ，これらの会話文は学生たちにとって適切な教材といえるのである．

ヒギンズと奥井はまた，単純な機械的読解よりも，会話練習が学生の読解能力を向上させるに適した方法であると考えている．集中的読解は，日本の高等教育において長らく伝統的な読解力強化方法として用いられてきた．大学院，研究，継続的職業訓練といった場では，とりわけ医療関連の分野においては，集中的読解は必須のものである．しかしより下のレベルにあっては，機械的読解は看護学生が患者と英語で話す助けにはあまりならない．また，自信を持って英語で意思疎通を行うことをうながすこともあまりない．

ヒギンズと奥井にはまた，独特の境遇にあったといえる．それは，過去には日本人教師

が授業を主導するのが常であったものを教えることのできるネイティブ・スピーカーを活用できる，という点である．この条件が，両名がそれぞれの強みを，それほど多くの時間を費やすことなしに，活かすことを可能にしたのである．たとえば，複雑な英語もしくは日本語の熟語的表現を説明する際には，ヒギンズはたやすくより簡単な英語の同義語を提供することができ，奥井もまたそれを困難なく日本語に翻訳することができるのである．

4．おわりに

ヒギンズと奥井の両名は，今後の研究のために，来年度から学生の自己評価アンケートを導入したいと考えている．また，会話パフォーマンス評定を，1回から２回，もしくは３回に増やすべきであるとも結論づけている．これを１セメスターの枠内で達成するために，テキストの一章を省いてシラバスを作成することになるであろう．

また，試験前に用いられた自習用ワークシートは，学生の授業内容理解を有効に補助するものであった．それゆえ，こうしたワークシートを用いた学習の機会を増やすことを検討している．これは，学生が，時間が許す範囲で授業内に取り組むことができ，残りを宿題として完成させるようなものとして想定されている．

ヒギンズおよび奥井の両名は，授業前のミーティングを今後も継続して行い，パフォーマンスをつねにチェックしてゆく方針を確認している．こうして，教員への，もしくは教員からのフィードバックを通じて，学生の学びをよりよいものへと導く方法を考察してゆくものとする．

注

(1) 衣川清子（1999）：Toward a More Learner-Centered Education——Alternative Ways of Teaching / Learning English Attempted at Saitama Women's Junior College ——より学習者本位の教育に向けて——埼玉女子短期大学における新しい英語教育の試み——，埼玉女子短期大学研究紀要 第10号，347－361 1993．や，赤井ひさ子，吉岡メリー・エレン（1994）：ティーム・ティーチングを取り入れた高等教育段階での英語教育 Overcoming obstacles in language learning ； team teaching at the junior college level，東海大学短期大学紀要 28．115－122，等が記録として挙げられる．

(2) 文部科学省（2007）：（別紙）文部科学省が一般的に考える外国語指導助手（ALT）とのティーム・ティーチングにおけるALTの役割，
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1304113.htm〉．（2017.11.24）ただし，初等中等教育学校においては，学校教育法の制約により，やむを得ずこのような体制になっていると認められる．